

九州天皇家論

8章 日本書紀神武天皇

日本書紀神武天皇の真実

日本書紀・神武天皇

日本書紀の神武東征行路を、もう一度、検討することにしてしよう。東征行路は通常次のように日本地図上比定されている。神武行路は研究者によって少し異なるが、九州一広島一岡山一大阪一和歌山一奈良である。だが、根本問題として果たして日本書紀編纂者はこのように想定していたのだろうか。そうではない。この近代比定は日本書紀の東征史実と異なる架空の比定である。その原因は神武東征の国名・地名を現代地図に沿って比定したからである。神武東征時における「筑紫」「安藝」「吉備」等々の古代国が近代地図の地名と一致するのかどうか、この簡単な考察が欠落したままの架空の比定が「神武天皇日本建国」という明治政府の国家史観を支えてしまった。

日本書紀が記した神武東征の真実、神武建国の真実をこの章では探求していきता。



(1) 九州・広島市・岡山古備

日向國（宮崎）－速吸之門（豊予海峡）－筑紫國・菟狹（大分宇佐）－筑紫國・岡水門（遠賀郡蘆屋町）－安藝國（広島県）－古備國（岡山県）

(2) 大阪府

難波崎・浪速國（大阪市東区）－河内國・草香邑・青雲白肩津（枚岡市日下町）－孔舎衛坂で戦闘（枚岡市）－草香津（枚岡市日下町）－茅渚の山城水門（泉南市）

(3) 和歌山県

名草邑（和歌山市）－狭野（新宮市佐野）－熊野・神邑（新宮市）－熊野・荒坂津（三重県紀勢町錦）

(4) 奈良県

菟田・穿邑（奈良県宇陀郡宇賀志村）－吉野（奈良県吉野）－菟田・國見丘の戦い－忍坂邑の宴会（桜井市）－層富縣（奈良県生駒市）－高尾張邑－軟傍山（橿原市）

（日本古典文学大系日本書紀頭注）

第一次東征は政治目的

神武東征において神武が最初に敵と対戦するのは「青雲白肩津」である。それまでの行路において戦闘はない。神武東征は「白肩津」以前と以後の二つに分けて考察されるべきである。「青雲白肩津」緒戦に到るまでの行程は「東征」といえるものではないが、この章では「第一次東征」としておこう。

「曲浦」「速吸之門」どこか

「第一次東征」の真実の行路はどうだったのか。「日向國」を出発した神武が最初に通過したのは「速吸之門」となっている。従来は、上の注釈のように「豊予海峡」と比定されている。「日向國＝宮崎」という比定に立てば、神武は「豊予海峡」を必ず通過する。それだけの根拠でこの比定となっている。「日向國＝宮崎」比定がそもそも問題なのであるが、この問題説明は後回しにして、まず「速吸之門」について考えていこう。なぜなら「速吸之門」特定のキーワードを日本書紀は残しているからである。

速吸之門に至ります。時に、一人の漁人有りて、艇に乗りて至れり。天皇、招せて、因りて問ひて曰はく、「汝は誰そ」とのたまふ。対（こた）へて曰さく、「臣（やつかれ）は是國神なり。名をば珍彦（うずひこ）と曰す。曲浦（わだのうら）に釣魚す。天神の子来でますと聞りて、故（こと）に即ち迎え奉る。」（日本書紀・神武天皇）

神武一行は「速吸之門」に到る。だが、東征上「速吸之門」には何の意味もない。単なる通過点で、記録するほどの意味があったのではないが、記録に残ったのはここである重要な人物に出会ったからである。その人物は自らを「珍彦（うずひこ）」と名乗り、「曲浦（わだのうら）」で漁をしていると言う。この意味は、むろん、今、漁をしていると言っているだけではない。「曲浦の漁」を支配する「國神」だと言ったのである。神武は「珍彦」を引き入れた。なぜならこの海が難しい海だったからである。

「珍彦」は自分の漁場が「曲浦（わだのうら）」であると言う。「曲浦（わだのうら）」とはどこか。私たちがこの浦の場所を特定できる理由は「曲（わだ）」という言葉が持つ意味にある。

親指とひとさし指で形づくる直角を「曲」という。大工道具の「曲尺」を「かねじゃく」「まがりかね」と呼ぶのと同じで、「曲」は直角を表す。従って、「曲浦」とは「直角の浦」の意である。

「曲浦」という名前が示すような直角の瀬戸はどこか。むろん「豊予海峡」にはない。九州に絞って探してみよう。「直角に曲がる海峡」とは下関市彦島の「小戸（小門）」である。まさに直角に曲がり、また直角に曲がる。「曲浦」とは彦島小戸の形状である。「珍彦（うずひこ）」の言葉は彦島小戸を正確に表現していたのである。「曲浦（わだのうら）」のピンポイント特定は西井健一郎氏（古田史学の会員）の功績である。

「曲浦（わだのうら）」の解明、特定によって神武行路の一つ定点を手に入れることができる。神武は彦島小戸を通過していたのである。

「珍彦（うずひこ）」という名も珍しい。彦島小戸はかってうずを巻いて流れるような急流であった。「珍彦（うずひこ）」という名もまた彦島小戸の潮の流れを言い表しているといえよう。

では「速吸之門」とはどこか。彦島小戸（曲浦）の出入口である。彦島小戸は海流の変化によって吸い込むように流れる。ゆえに「速吸之門」と呼ばれたのである。「曲浦」と「速吸之門」はワンセットの言葉である。

彦島小戸の支配者、「珍彦」が神武一行を迎えたのは巖流島の近くであろう。「珍彦」が言う。

**私は國神で「珍彦」と申します。私の仕事は「曲浦（わだのうら）」での漁でございます。
この直角に曲がる瀬戸を「曲浦」と云います。「日向」の天神の子が来られると聞き、あ
なたをお迎えするためにこの瀬戸の出入口の「速吸之門」まで来てお待ちしております。**

神武は紀元前1世紀半の人である。「珍彦」の言葉は2000年の時を越えて原初性を保っていたのである。彼の言葉は今に真実を伝える。「曲浦」とは彦島小戸、「速吸門」とは彦島江の浦町と下関市大和町の間で裂けた海峡（小門・小戸）の出入口を指す。現在、この海峡は死んでいる。下関市大和町と彦島本村町の狭い瀬戸に水門が設置されて、瀬戸の流れを止めているからである。古代は潮の流れの影響で、「速吸門」と呼ばれるのに相応しい潮の流れがあったのである。



神武一行が船で進んだ海は「日向灘」ではない。関門海峡である。神武一行は関門海峡を航海することになった。ところが、この複雑な海について神武はよく知らなかった。そこに偶然にか、うまい具合に「速吸之門」で海を熟知した漁場の支配者が神武を待っていた。神武は彼をパイロットに採用し、難しい海を乗り切った。

古事記では亀の甲に乗って釣りをしていた漁師に会い、その人物の先導のおかげで、無事、関門海峡を通過できたとなっている。本当に亀の甲に乗っていたかどうか分からないが、彼はこの漁場の支配者だったのである。この人物の子孫が、後に、「倭國造」となった。

彦島「小門」での昔の漁の写真が偶然泊まった彦島の古い旅館が備えていた写真集の中にあった。大正初期のものである。「小門」は古来漁場であった。写真集の注釈は「小瀬戸海峡をせき止め以前は十一ノットの急潮で、焚いた火の明かりに集まる魚を捕って賞味する小門の夜焚火が下関名物の一つであった」と説明している。

小門の夜焚舟（大正初期）
神武の時代もこのような漁がおこなわれていたの
であろう。



「日向國」はどこか

この特定に立って、神武の出発地、「日向國」に戻って考察しよう。

日本書紀：日向國（高千穂宮）－速吸之門－筑紫國・菟狹－筑紫國岡木門－安藝國（埃宮）

神武は東征に先立ち、「東に美（よ）き地有り。青山四周れり。」と述べて、向かうべき方角が「東」であることを明らかにしている。神武がいた「日向」という地名は、「日が向かう」という意味で、「西」を意味する。同じ意味のことを神武は「故、蒙くして、正を養ひて、此の西の偏を治す。」と述べている。故に神武の宮は「西の宮」とも呼ばれたのである。

今、我々は西に住んでいるが、東の方には美しい土地がある。四方は青山に囲まれている。

「東の美き地」がどこか、これだけでは神武の想定がどこかは分からないが、神武の視線は「東」に向けられている。「何ぞ就きて都つくらざらむ」と、神武は首都建設のために「日向」の地を出て、「東」に向かうことを決意する。

「日向國」の港から神武と一族を乗せた船が海に漕ぎでた。神武はその海を「東」に進んだ。そして「速吸門」にさしかかった。この「速吸門」が彦島小戸である。

神武が王朝の首都を求めて神武が船出した海とは関門海峡である。この経過から「日向」の位置が定まってくる。神武がいた「日向國」とは彦島小戸より「西」に存在した土地である。正確に言えば、関門海峡の形状から考えて、「日向國」の位置は彦島小戸の南西ということになる。

通常、「日向國」は宮崎県と比定されている。この場合、神武が「曲浦（彦島小戸）」「速吸之門（彦島江の浦町）」を通過することはない。いや、通過することはいり得る。しかし、その場合の進路は「東から西へ」となり、日本書紀が記す方向「西から東へ」とは逆である。神武の進路は「西から東」である。「日向國＝宮崎県」比定はまちがいである。

神武の東征路の確定作業では定点を必要とする。その定点は「珍彦」の言葉が伝える「曲浦」「速吸門」である。「曲浦」は彦島の小戸で「速吸門」は小戸の出入口である。従って、神武が見た海は関門海峡である。近代の研究者が「速吸門」を豊予海峡と比定したのは、「日向は宮崎」を定点としたからである。しかし、「日向」は定点ではない。「日向」を確定できる記述は記紀にはない。だが、「曲浦」は定点となる。神武が船で乗り込んだ海は関門海峡で、神武は関門海峡を「西から東に」進んだ。そして彦島小戸を通過した。

「日向國」は小倉北区

神武が都を求めて旅に出たのは「日向國」である。その「日向國」は彦島小戸の南西方向にある國である。それは小倉北区ということになる。

一方、神武の宮は「高千穂の宮」である。「高千穂の宮」の所在地については「第2章天孫降臨」で考察した。「高千穂の宮」の名前は「天孫瓊瓊杵尊」が降臨した「高千穂のクシフル岳」に由来する。「高千穂のクシフル岳」とはどこか。彦島の対面、企救半島の足立山である。「大八洲」の首都「天（あま・彦島）」から出立した「瓊瓊杵尊」は企救半島の尾根を伝い、足立山に至った。この山から小倉北区に降った。この道程が「天孫降臨」である。神武は足立山の麓に存在した「高千穂宮」に居た。

彦島の南西の小倉北区と足立山の麓の神武の宮とはその場所是一致的。神武が出発した「日向國」とは小倉北区、「高千穂宮」とは足立山の麓、小倉北区の「瓊瓊杵尊」の王宮である。

日本書紀編者は神武は小倉北区の「日向」の「高千穂宮」から出立して、関門海峡を北東に進み、彦島「速吸門」に到ったとリアルな行路を記した。

神武は舟と舟を繋いで関門海峡を北東に上がってきた。すると、彦島小戸の支配者、「珍彦」が関門海峡巖流島の近くで天神の子、神武一行を待っていた。これが日本書紀が記した行路である。神武の次の行程は「筑紫國菟狹」である。

「筑紫國岡水門」は門司港

神武が「日向（小倉北区）」から出立して「速吸之門（彦島小戸）」を通過し、着いた場所が「筑紫國の菟狹」である。ここで「筑紫國の菟狹」とわざわざ限定したのは、もう一つの「菟狹」が小倉北区にあったからである。現在でもその地名が残る。神武一行は「筑紫國菟狹」の支配者「菟狹津彦」によって歓待を受けている。従って「筑紫國菟狹」は東征の目的地ではない。立ち寄ったに過ぎない。むしろ、目的地は「筑紫國の岡水門（おかのみなと）」にあったと言えるであろう。「水門」とは港のことである。「岡の港」とはどこか。神武東征路の一つの難題である。

しかし、その特定は難しいことではない。神武航路を素直に進めば到達する。「速吸之門」を

北上した神武の船が停泊した「筑紫國」とは旧門司である。そして「岡水門」とは門司港である。

足立山山頂から小倉北区に降臨した「瓊瓊杵尊」は「筑紫」の開拓に「尽くした」と伝わる。故に、「筑紫（ツクシ）」と云うのだという地名説話であるが、「瓊瓊杵尊」が「尽くした筑紫」とは旧門司である。開拓場所とは「岡水門」、つまり門司港であろう。

神武は彦島「速吸門」を北上して「筑紫國の岡水門」、門司港を目指していたのである。神武は「大八洲」王朝の統治者として、より適切な都を求めていた。それが、「日向（小倉北区）」を離れて「東」をめざした理由であった。だが、今、考えると、北九州では博多を除けば、小倉北区が最大の都市である。なぜ、この繁栄している地を離れたのか、と疑問であるが、神武の時代、小倉北区はそれほど大きな都市ではなかったのであろう。「天孫ニニギ」降臨の頃の小倉北区の呼び名は「葦原中國」である。この名前が示す通り、葦が一面に生えている土地だったと思われる。神武の時代では、小倉北区より、むしろ、門司の方が繁栄していたと思われる。関門海峡を渡るには関門大橋の下を渡るのが最短で一番渡りやすい。「筑紫國の岡水門（旧門司）」ここが、人、物が行き交って最も栄えた港町だったのであろう。



神武東征「筑紫國」は博多ではない

神武は「筑紫國」で二カ所に立ち寄っている。「筑紫國・菟狹」と「筑紫國・岡水門」である。

「菟狹」は地名で「岡水門」とは港である。神武は「菟狹」で土地の支配者「菟狹津彦」「菟狹津媛」兄妹から接待を受けた。「菟狹」は大分県宇佐と比定され、「岡水門」は遠賀郡蘆屋町に比定されている。しかしこの比定は神武が「日向（宮崎県）」から北上してきたと想定してもそのコースから大きく外れる。

だが、宇佐寄港はまだあり得るかもしれないが、「岡の水門」を遠賀郡蘆屋町と比定するとそ

の寄港はコース上全く考えられない。もしこの寄港が史実だったとしたら何か特別な理由があったはずである。しかし「岡水門」寄港の理由を日本書紀は何も書いていない。わざわざコースから大きく外れて大分県宇佐、福岡県遠賀郡蘆屋町に寄港した理由はないであろう。

また「菟狭」に比定される「宇佐」は大分県である。大分県の「菟狭」は「筑紫國の菟狭」ではなく「豊國の菟狭」というべきであろう。

近代以降の研究者は「筑紫國」に困惑している。神武東征行路の「筑紫國・菟狭」「筑紫國・岡水門」を福岡県のどこに比定しようとも、宮崎県日向から神武は出立したのだという想定に立つ限り、「筑紫國」寄港は全く不要となり、必然はない。

これは日本書紀が不当という問題ではなく「日向は宮崎」「筑紫は福岡」という近代比定が不当なのである。



古代地名と新地名の二つが存在する

だが、しかし、現在「筑紫」とは福岡県をさすではないか。「筑紫」は福岡、「豊」は大分、「肥後」は熊本、「肥前」は佐賀ではないか。「筑紫」も「豊」も古来からこれらの国をいったのではないか。ほかに「筑紫」、「豊」が存在したという記録はない。このような疑問が生ずるであろう。当然な疑問であるが、これには理由がある。

古事記・日本書紀に登場する「筑紫國」「豊國」「日向」「吉備」「安藝」等々の古代国家は現在私たちが知っているこれらの名前の国々とは異なるのである。その理由は7世紀の政変に由来する。

ここで先に結論を言わなければ解説できないので結論を言おう。神武東征とは九州北東部だった。そして神武は九州で一つの王朝を啓くことになる。この王朝を九州天皇家と呼ぶことにする。

以降、神武の後裔は九州の東北部を統治していくことになる。その一人に天武がいた。天武の

時、古代天皇家にとって大事件が勃発する。壬申の乱である。九州天皇家天武が日本全体を支配していた国家（日本國天皇家）に勝利し、日本列島の王（天皇）の位置に昇るといふ政治的大変革が生じた。その後、天武は太宰府で全国を統治した。天武は太宰府を出なかったが、妻持統は天武の死後、太宰府から奈良藤原京に移りそこで即位した。ここに九州天皇家と日本國天皇家を統合した近畿天皇家といふべき王朝が始まることとなった。

持統政権は新しく支配することになった全国の国々に新しい国名を付けた。新しい支配者としては当然の施策であったが、その新しい地名、国名に九州天皇家の地名、国名を用いた。現在、私たちが知っている「出雲」「筑紫」「豊國」等の名前は8世紀持統天皇家によってつけられた新しい地名である。

例えば7世紀までの九州天皇家の世界では「伊豫二名嶋」は「二名」といふ名前が示すように、「伊豫」または「豊」といふ二つの名前と呼ばれた女王が支配した島で、この女王國は彦島に存在した。ところが8世紀近畿天皇家の世界では「伊豫」とは愛媛伊豫で、「豊」とは大分県である。同じ「伊豫」でも九州天皇家の「伊豫（彦島）」と近畿天皇家の「伊豫（愛媛県）」と二つの「伊豫」が存在するのである。

同じように九州天皇家「出雲」は小倉南区に存在した古代国家であった。現在で「出雲」と云えば島根県である。九州天皇家世界の「出雲」と8世紀近畿天皇家の新しい「出雲」とは異なる。「筑紫」も同様である。神武東征における「筑紫」とは門司（門司港）である。ところが8世紀の持統近畿天皇家の世界では「筑紫」は福岡県をさすのである。

私たちが九州天皇家の7世紀世界と近畿天皇家の新しい8世紀世界を区別しないで記紀の地名を読むととんでもない誤読となる。記紀は7世紀世界の国名、九州天皇家世界の地名で読まれなければならない。その典型が「國生み」である。8世紀の新しい世界の地図で「大八洲國生み」を読むと次のようになる。

淡道之穗之狭別島・・・・・・・・・・兵庫県淡路島
伊豫之二名嶋・・・・・・・・・・伊豫愛媛（四国）
隠岐之三子島・・・・・・・・・・隠岐
筑紫島・・・・・・・・・・九州
伊伎島・・・・・・・・・・彦島
津島・・・・・・・・・・門司
佐渡島・・・・・・・・・・佐渡
大倭豊秋津島・・・・・・・・・・本州（奈良）

この比定が8世紀近畿天皇家の新しい世界に於ける比定である。この比定が不合理であることは「大倭豊秋津島」が本州と比定されていることを考えても明らかである。この島の名前には「豊」が使われている。「豊」とは女王の名前である。「大倭豊秋津島」も「伊豫二名嶋」も女王「豊」が支配していた島であった。「大八洲」はいずれも小さな洲に存在した小さな弥生集落（港町）に過ぎない。それを本州であるとか九州であるとか四国であるとか比定するのはとんでもない勘違いである。國生みの「大八洲」は次のような関門海峡の嶋の小さな弥生集落である。

淡道之穗之狭別島・・・・・・・・・・若松区高塔公園
伊予之二名嶋・・・・・・・・・・彦島・老町
隠岐之三子島・・・・・・・・・・下関市伊崎町
筑紫島・・・・・・・・・・旧門司古城山
伊伎島・・・・・・・・・・門司田野浦
津島・・・・・・・・・・門司田野浦
佐渡島・・・・・・・・・・門司田野浦

「大八洲」とはその名前が示すように、関門海峡の周辺にできた小さな「洲」に存在した弥生集落であった。「筑紫嶋」とは門司古城山である。古城山は太古「嶋」だった。やがてこの「嶋」と企救半島の間に「洲」が形成された。この「洲」と古城山には4つの弥生集落が作られていた。その一つが「筑紫國」である。「大八洲」における「筑紫國」は小さな弥生集落にすぎない。それが8世紀では「筑紫嶋」は九州全体を指し、「筑紫國」は福岡県を指すようになったのである。

しかし、神武東征「筑紫國」とは「大八洲」の「筑紫國」である。この「筑紫國」は旧門司に当たるであろう。

神武が生きた紀元前1世紀世界と8世紀の近畿天皇家世界は区別されなければならない。

「奈良」という地名を考えてみよう。「奈良」は現在、奈良県の地名として定着している。「奈良」といえば古都奈良である。しかし、古代世界では「奈」とは一文字で「波」の意であった。

「奈良」とは「波が良し」と云う意味である。「ならず」という日本語も穏やかな波のように平らにするという波に関係する言葉として産まれたものであろう。「奈良」は古代世界では海の民の言葉であった。ところが8世紀の近畿天皇家の新しい世界では、奈良盆地の地名として定着した。奈良盆地は平らである。近畿天皇家はこの平らな盆地を海の民の好字である「波が良し」を使って「奈良」と名づけた。従って内陸の地名としてはそぐわない「奈良(波が良し)」が使われているのである。

もう一つ。「淡海(あわ)の海」はもともと小倉南区曾根干潟の海を指した。曾根干潟に広がる海はまさに「淡(あわ)の海」である。「淡海(おうみ)」は本来は海で、湖ではない。滋賀県琵琶湖の名前は「近江」で、「淡海」と表現されたのではない。「近江」と「淡海」とは本質が異なる。「近江」は湖、「淡海」は海である。

「安藝國」が当初の目的地

神武東征に戻ろう。神武が「日向國」の「高千穂宮」を出て、最初に目指した「筑紫國岡水門」とは門司港である。ここには関門海峡最短の渡しがあった「筑紫國岡水門」は古来繁栄した港町であった。故に神武は首都候補の一つとしてここを訪れたのである。しかし、この港町は神武の意に沿わなかったのであろう。長く滞在することなく、次の「安藝國」に移っている。

この「安藝國」はどこか。これが難問であった。神武が居た「安藝國」とはイザナギ建国の「大倭豊秋津嶋」にあった弥生国家である。当初、長府が相応しいと考えていたが、この比定では「大倭豊秋津嶋」という名前が異議を唱える。この嶋の名前は「秋津(トンボ)」の意を持つ。「トンボ」が納得する比定でなければならない。

ヒントは同じ神武紀にあった。後年、神武は「熊襲」の王との激戦の地だった「伊那佐山」に登って國見をした。この丘とは小倉南区長野城山である。この丘が後の「國見の丘」である。

実は私にとって「國見丘」の発見の方が「安藝國」発見よりを早かった。小倉南区長野城山に登った神武は國(小倉南区)を見て「蜻蛉(あきつ)のとなめ(トンボの交尾)のように見える」と感想を述べた。この時、神武は何を見ていたのか。それは川である。神武は小倉南区を流れる竹馬川を見ていたのである。竹馬川は湾曲して流れる。この川の湾曲を「交尾するトンボ」と表現したのである。

ではなぜ神武はこのような誰もが持ち得ない特異な感想を思いついたのであろうか。その理由が7年居た「安藝國」にある。「安藝國」は「大倭豊秋津嶋」にあった。この嶋の名前にも「秋津(トンボ)」が入っている。この國にもまた神武が感想を述べた「交尾するトンボ」を彷彿させる湾曲して流れる川があったのである。長府にはそのような川は存在しない。「安藝國」は長府ではない。広島安芸でもない。むしろ本州でもない。

「安藝國」とは門司大積

関門海峡周辺に「トンボの交尾」のように流れる川が存在するか。思いもよらず門司大積にその川があった。ここにはまさに交尾する蜻蛉(トンボ)のように流れる川がある。奥畑川である。

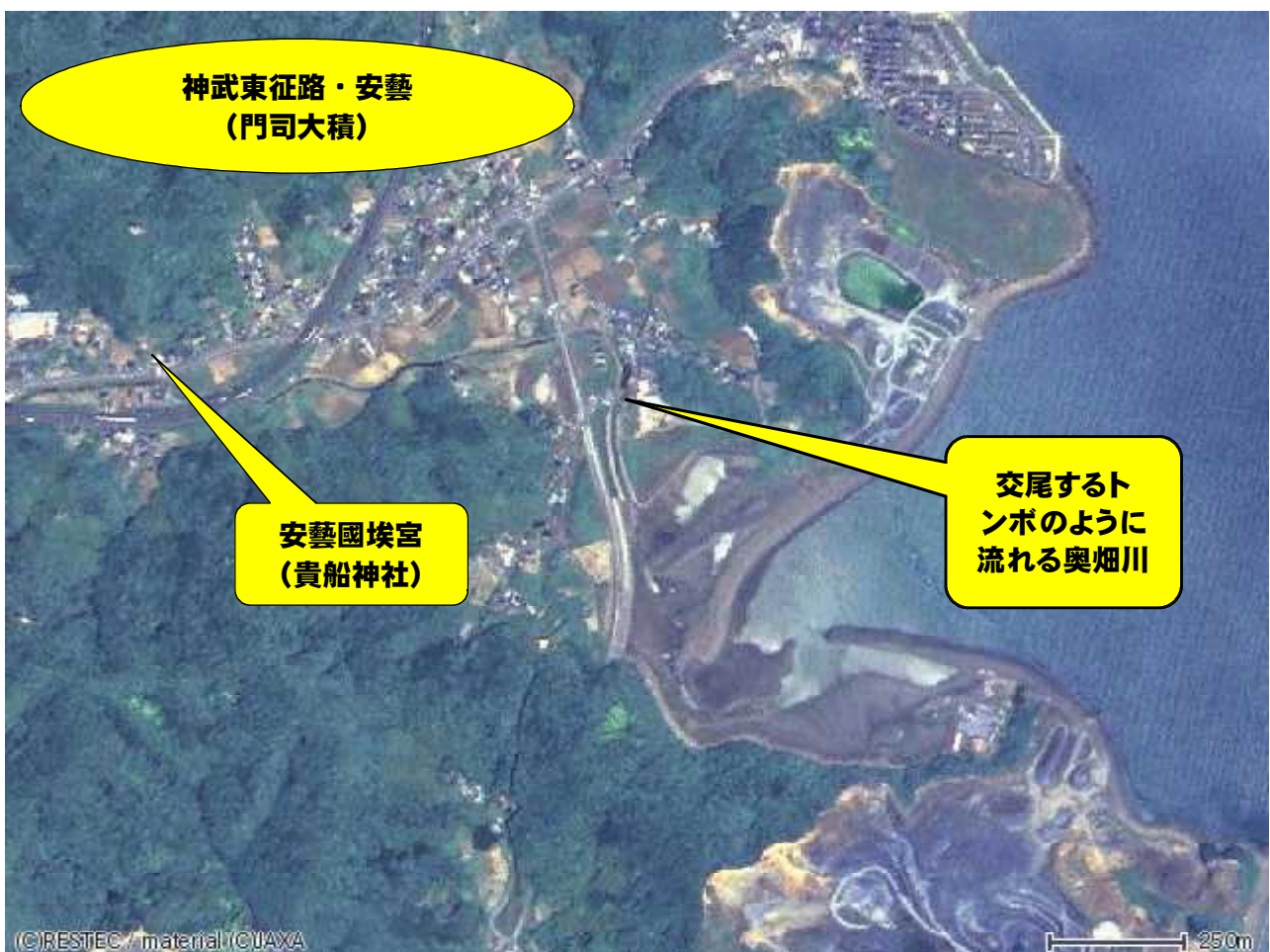
この川を見て伊邪那岐命は「秋津嶋」と呼んだのである。あるいは伊邪那岐命以前に土地の人々は「秋津嶋」とすでに呼んでいたのかもしれない。

神武は「安藝(門司大積)」の「埃宮」に7年(二倍歴と考えれば三年半)滞在した。この國が何故「安藝(トンボ)」という意味の名前を持つのか、神武を初め國の人々はよく知っていたのであろう。

「安藝國」は湾曲する奥畑川の扇状地(洲)にできた國である。奥畑川は國の母である。そして奥畑川が國の象徴である。この川は「トンボの交尾」のように流れる。「この國はトンボの國だ」これが國の人々の共通認識だったのである。神武はこの認識の上に立って後年小倉南区の竹馬川の流れを見て、即座に「私にはトンボの交尾のように見える」と感想を述べたのである。

「安藝國」とは門司大積である。神武は「筑紫國岡水門(門司港)」から「安藝國(門司大積)」へ行く際、陸路を歩んだ。神武以前から「筑紫國」と「安藝國」をつなぐ陸路が存在した。県道25号線である。この道が関門海峡と周防灘をつなぐ交通の要路だった。門司港から南に企救半島を縦断すればすぐ大積に到着する。

神武が7年滞在した「埃宮」は大積のどこにあったのだろうか。奥畑川を遡り、九州自動車道門司ICを降りたところに貴船神社がある。この神社が「埃宮」である。神武はこの宮で7年間すごしたのである。



「安藝」で東征を決意

日本書紀 日向（高千穂宮）－速吸之門－筑紫國・菟狹－筑紫國岡水門－安藝國（埃宮）
古事記 日向（高千穂宮）－豊國宇沙－筑紫・岡田宮－阿岐國（多祁理宮）

神武は「日向」を出て「筑紫・岡田宮」にしばらく滞在、次に「安藝國・埃宮」に7年滞在した。この旅は「大八洲」王朝を統治するにふさわしい首都をどこに定めるか、どこが政治経済の中心地＝首都にふさわしいか、その探求の旅であった。「筑紫國」も「安藝國」も伊邪那岐命が統合した「大八洲」の国々であった。従ってこの間には記紀共に戦闘記録はない。

神武が訪れた「筑紫國」「安藝國」ともに「大八洲」つまり港町である。「安藝國」である門司大積はその名前が表す如く、周防灘に面した良港であった。関門海峡の難しい波を避けてこの港から多くの荷物が積み出された。よって「大積」と云われたのである。

神武の当初の目的地はこの「安藝國」にあったのではないかと思われる。つまり「安藝」がゴールである。普通「安藝國」は「ゴール」ではなく「通過点」と理解される。その理由は「安藝」を広島、「吉備」を岡山と比定するからである。だが、神武は「安藝」を「大八洲」統治の首都と考えて、ここに7年滞在したのである。「大積」はそれほど栄えた國だったのであろう。「門司大積」は当時、神武支配の「大八洲」の国々の中では最も栄えていた國だったかもしれない。國の首都となるのはその國で最も繁栄している都市である。

神武はこの地を「大八洲」統治の首都とするつもりで訪れた。そして7年住んだ。もし神武がここでの生活に満足し、その生涯を終えていたなら、記紀は神武についてほんのわずかな記録を残しただけだったであろう。だが、この7年の門司大積在住が神武の認識を変え、その後の人生を変えた。「安藝」在住の間に神武は真に政治的、経済的に中心となるべき國を知ることになった。「日向國」よりも「筑紫國」よりも「安藝國」よりもさらに豊かな國を知ったのである。

その國が欲しい。しかし、その國を手に入れるには兵が要る。武器が要る。そして兵を運ぶ舟が要る。それらを調達しなければならない。それが可能なのはどこだ。吉備だ。

神武は「安藝」で「東征」を決意した。そして、「吉備」に向かった。神武東征における「吉備」の位置づけは「安藝」とは全く異なる。「安藝」は政治、「吉備」は軍事である。

「吉備」は彦島西山町

「吉備」とはどこか。「吉備」も伊邪那岐命の國生みに登場する「大八洲」の弥生国家の一つである。伊邪那岐命は「安藝」を生んでのち「吉備」に向かっている。それは神武と良く似ているが、伊邪那岐命の「吉備」行きはUターンである。

然ありて後、還り座す時、吉備児島を生みき。亦の名は建日方別と謂ふ。次に小豆島を生みき。亦の名は大野手比売と謂ふ。次に大島を生みき。亦の名は大多麻と謂ふ。次に女島を生みき。亦の名は天一根と謂ふ。次に知訶島を生みき。亦の名は天之忍男と謂ふ。次に両児島を生みき。亦の名は天両屋と謂ふ。
(古事記・大八嶋の生成)

「然ありて後、還り座す時、吉備児島を生みき」とは「阿岐（安藝）國」を生んで後、還る時に「吉備児島」を生んだということである。「還る」とは出発地である「大八洲の首都に帰る」という意味である。当時の「大八洲」の首都は「高天原（たかまがはら）」である。「高天原」とは彦島老町「老の山公園」に存在した弥生国家である。

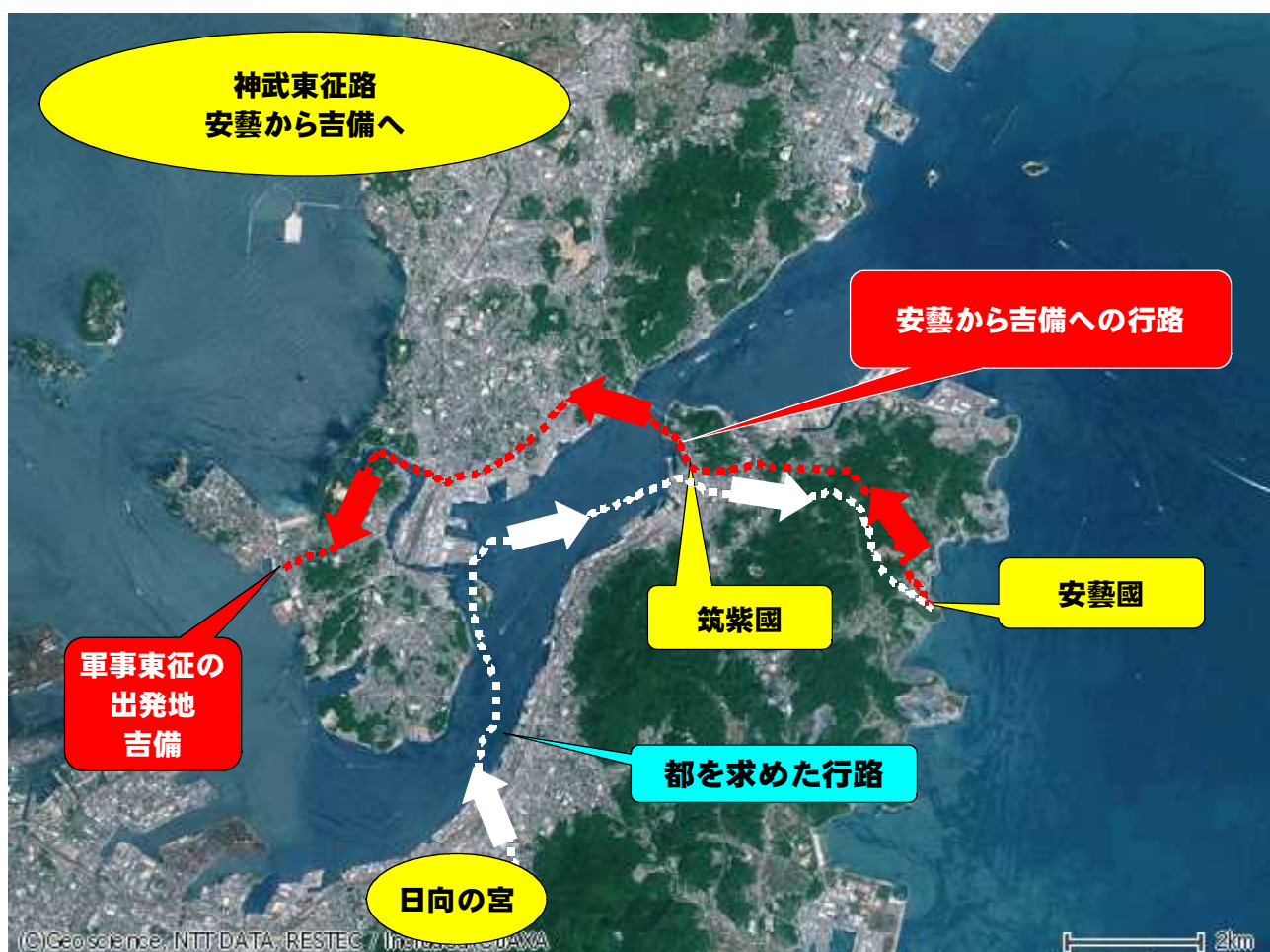
イザナギ・イザナミは「大八島」建国の大業を終えて、故郷の「高天原」へ戻った。そしてもう一度、国家建設の旅に出発した。その最初の國が「吉備の小島」であった。「大八嶋」生成記事は「安藝國」から「吉備」への路は「復路」であると記録している。イザナギ・イザナミは彦島から出立して「大八洲」の最後の國「安藝」を生み（実は統合）、再び彦島に戻ったのである。この道程は神武が「安藝」から「吉備」に渡った道程と同じである。神武はイザナギ建国の国々を歴訪してのち、イザナギと同じように「安藝國」から「吉備」に渡ったのである。

「吉備児島」とは彦島竹の子島町である。「吉備」とは彦島西山町である。

神日本磐余彦天皇、諱（ただのみな）は彦火火出見。彦波瀲武 鸕草葺不合尊の第四子なり。母をば玉依姫と曰す。海童の少女なり。天皇、生れましなからにして明達し。意如（かたくつよ）くます。年十五にして立ちて太子と為りたまふ。長りたまひて日向國の吾田邑の吾平津媛を娶きて、妃としたまふ。
（神武紀）

神武は「日向國」の「吾田邑」の「吾平津媛」を妻とした。「吾田（あた）」とは直角という意味である。「吾田」は「曲」と同じである。「吾田」「曲」は彦島小戸を意味する言葉である。神武の妻は彦島小戸の「吾田邑」の豪族の娘だった。神武が「吉備」に渡ったのは、そこが妻の実家だったからである。

神武行路「安藝國（大積）」から「吉備（彦島西山町）」へ



「吉備國」から軍事的東征へ出立

神武は「安藝國」で軍事を決意した。そして、その準備のため、妻の実家の「吉備」へ渡った。「吉備」は、当時、得がたい造船技術を持った海部の里であった。軍事侵略を決めた神武は「吉備」に渡らなければならなかった。神武軍の中心は「来目（久米）の子」である。彼らは神武歌謡で何度も歌われ称えられている。彼らは顔に入れ墨をしていた。彦島の海の民だったからである。「来目（久米）の子」は得難い彦島「吉備」の海部であった。「吉備」こそが神武東征にとって必須、必然の國であった。

乙卯年の春三月の甲寅朔己未（6日）に、吉備國に従りて入りましき。行宮を起りて居す。是を高嶋宮と曰ふ。三年積る間に舟楫を脩（そろ）へ兵食を蓄へて、將に一たび挙げて天下を平けむとす。

戊午年の春の二月丁酉朔丁未（11日）に皇師遂に東にゆく。舳艫相接げり。方に難波之碇に到るときに、奔き潮に有りて太だ急きに会ひぬ。困りて、名けて浪速國とす。亦浪花と曰ふ。今、難波と謂ふは訛れるなり。
（日本書紀神武天皇）

神武は「吉備」の「行宮・高嶋宮」に3年（二倍歴として1年半）居た。滞在期間としては短い。「東征」を急いだのであろう。彦島「吉備」は妻の里であったが、神武自身も彦島の生まれではないかと思われる。神武の名は「神倭伊波禮毘古命」である。「神」は尊称、「倭（やまと）」は神武が征服した国名である。名前の実体は「伊波禮」で、「伊波禮」とは「磬割れ」である。「磬割れ」とは彦島の異称である。

こうして神武は3年の間に、舟を造り、兵を集めて、今度は政治家としてではなく軍人として、統治者ではなく侵略者として、東の豊かな國をめざして東征に出立したのである。ここからが本当の神武東征の始まりであった。

日本書紀 吉備國－難波崎・浪速國－河内國・河内國・草香邑・青雲白肩津

古事記 吉備國－速吸門（彦島小戸）－浪速の渡り－青雲の白肩津

記紀共に、「吉備」から出立している。異なる点は古事記行路の「速吸門」である。日本書紀では神武は「日向」を出た海路で、すぐ、「速吸門」を通過している。古事記では神武は「日向」の宮を出て、「筑紫國」、「阿岐國」と都を求めて旅をしたが、その行路は陸路、徒歩だった。故に、この行路に「速吸門」はなかった。神武の第一次東征というべき旅は日本書紀は海路、古事記は陸路と異なる。どちらが史実か判断はできないが、どちらもありうる。どちらの行路でも「速吸門」は同じである。彦島小戸である。古事記では、神武は「吉備」を軍事出立した時、「速吸門」で関門海峡をよく知る彦島小戸の支配者と出会い、先導させたというのである。

必然の吉備造船

日本書紀は、「吉備」で「舟を脩（そろ）へ、兵食を蓄へて」と書いている。だが、日本書紀では、神武は「日向」を出た時、船で「速吸門」へ進んでいる。神武は、この時、すでに船をもっていたのである。それが、何故、「吉備」で造船したのか。第一次東征は軍事ではなく、政治的な旅だったので、兵は伴っていなかった。故に、小さな船で十分であった。しかし、軍事東征には多くの兵が必要である。その兵を運ぶ軍用船が必要である。故に、神武は「吉備」で造船した。神武は「吉備」で造船し、徴兵して、東征に出立したのである。

「吉備」で軍用船を作ったことが史実である。故に、日本書紀は、「吉備造船」を記載したのである。日本書紀は「吉備の高嶋宮」は「行館（かりみや）」だと丁寧に書いている。この記述も正確で辻褄があう。「吉備」は神武の妻の里だった。故に、「行館（かりみや）」だったのであ

る。ところが、神武が歴訪した「筑紫國」の宮、「安藝國」の宮は本宮であった。なぜなら、これらの國は神武王朝の直轄地だったので、その宮は本宮だったのである。だから、もし、「安藝」が広島をさすのであれば、当然、この宮も「行館（かりみや）」である。しかし、日本書紀は「安藝」の宮を「行館」とは書いていない。「安藝國」は神武の直轄地だったからである。

神武はこれらの直轄地の中で「安藝國」を首都と定め、定住した。当初の目的は「安藝」ゴールであった。しかし神武の人生は「安藝」で終わることはなかった。神武は「安藝」で侵略を決意したからである。しかし、軍事侵略に不可欠な兵がない。武器がない。兵を運ぶ舟がない。

さて、どこで造船するか。神武の統治國である「筑紫國」「阿岐國」には造船技術はない。造船技術を持つのは妻の実家、「吉備」だ。そこで、神武は妻の実家に身を寄せ、入れ墨をした海の民の技術を用いて造船したのである。だが、舟はできても舟だけが勝手に動くわけではない。当然、海を知り、舟の扱いに熟達した人間を必要とする。こうして、神武は「吉備」で徴兵して、海部一族を引き連れて「東征」に出発したのである。



「吉備」は海部の國

造船は「吉備」の海部でなければできなかった。彼らは舟で漁を生業とするプロフェッショナル達だった。それ故にこそ、造船が可能だった。当時、造船は今私たちが考えるほど簡単な技術ではなかったであろう。特別な技術・技能の持った伝統的専門集団でなければ、荒海の航海に堪える舟を造ることはできない。その事情は現代でも同じである。現代でも、船大工になるには高い技術と長い修練が必要なことは云うまでもない。また、そのような有能な技術集団はどこにでも存在したというものではなかったと思われる。ところが、神武の妻の実家には稀少な海部集団が存在した。彼等においてのみ造船が可能であった。

神武が軍事侵略を「日向」で決意したのであれば、最初の出発地である「日向造船」でなければならない。「東征」は舟を使ったのであるから、その出発地で造船が行われたというのが妥当である。しかし、記紀共に、「日向造船」とは書いていない。なぜなら、当初神武の頭には「軍事侵略」はなかったからである。神武が軍事を決意したのは「安藝國」だった。だが「安藝國」には造船技術はない。故にまた「安藝造船」とも書かなかったのである。

それが可能なのは妻の実家がある「吉備」だ。こうして神武は「吉備」に渡ったのである。海部集団が存在した古代「吉備（彦島）」だけが造船可能な国だったのである。

絶対の「吉備」軍事出立

「吉備造船」は変更不可の厳然たる事実であった。「日向」から「安藝」までは、非軍事の旅であった。軍事東征は「吉備」に始まった。故に、日本書紀は「吉備で造船した」と記録したのである。

日本書紀では「日向」から「筑紫國」への道は海路である。当然船を利用した。この船と「吉備」で作られた船とは区別されなければならない。「日向」からの船は「筑紫國」で乗り捨てられた。「筑紫國」から「安藝國」へは企救半島を縦断する陸路であった。

古事記を見てみよう。古事記では神武は「日向」から「吉備」まで船を使っていない。企救半島の東側の海沿いの陸路を歩いたのであろう。そして「筑紫國」から「安藝國」は日本書紀と同様陸路である。ここまで船の使用はない。神武が船を利用したのは「吉備」からである。つまり「吉備造船」である。「吉備造船」によって軍事東征は成り立ったのである。

日本書紀、古事記とも神武は「吉備」から軍事出立した。これが史実である。神武東征は「吉備」の妻の実家の支持支援なしには成り立たなかったのである。

神武が「安藝」で決意した「東征」構想は海軍によるものであった。船が欲しい。船は「吉備」でしか造ることができない。神武は「安藝（大積）」から「筑紫（門司）」に戻り、そこから関門海峡を対岸に渡り「吉備（彦島西山町）」に入って初めて大きな船を造った。その行路を日本書紀は次のように書いた。

乙卯年の春三月の甲寅朔己未（6日）に、吉備國に徙りて入りましき。行宮を起りて居す。是を高嶋宮と曰ふ。三年積る間に舟楫を脩（そろ）へ兵食を蓄へて、将に一たび拳げて天下を平けむとす。
（日本書紀神武天皇）

神武は「吉備國」に「徙りて（渡りて）」入った。渡った海とは関門海峡である。「吉備國」は「筑紫（門司）」の対岸、彦島に存在した。

神武は軍事的東征に船を使った。兵を乗せた船が出た「吉備」の港とは彦島西山町の港である。神武は彦島に存在した古代「吉備」の港から、関門海峡に出て東征に出発したのである。

彦島「吉備」造船が絶対、彦島「吉備」出立が絶対である。彦島「吉備」造船が史実。彦島「吉備」徴兵が史実。軍事東征は彦島「吉備」出立が真実である。

「浪速（難波）の海」は関門海峡

神武は戊午年の春の二月丁酉朔丁未（11日）に東征に出発した。「吉備國」を出た神武一行は「難波の崎」を通過した。この海は浪が速かった。故にここを「浪速」と云った。それが訛って「難波」というようになった。「難波崎」とは若松区高塔山である。「難波」とは関門海峡の海である。関門海峡は潮の流れが速い。その「難波」は関門海峡の海である。



**神武東征路・浪速
(関門海峡)**

「浪速の渡し」は「壇ノ浦の渡し」

「難波」、関門海峡を北上した神武は「浪速の渡し」（古事記）を通過する。「浪速」とは関門海峡である。関門海峡を縦断する「渡し」とはどこにあったのか。その渡しは近年まで存在した壇ノ浦の「渡し」である。むろん現代は橋である。



**神武東征浪速の渡し
(関門大橋)**

[illegible]